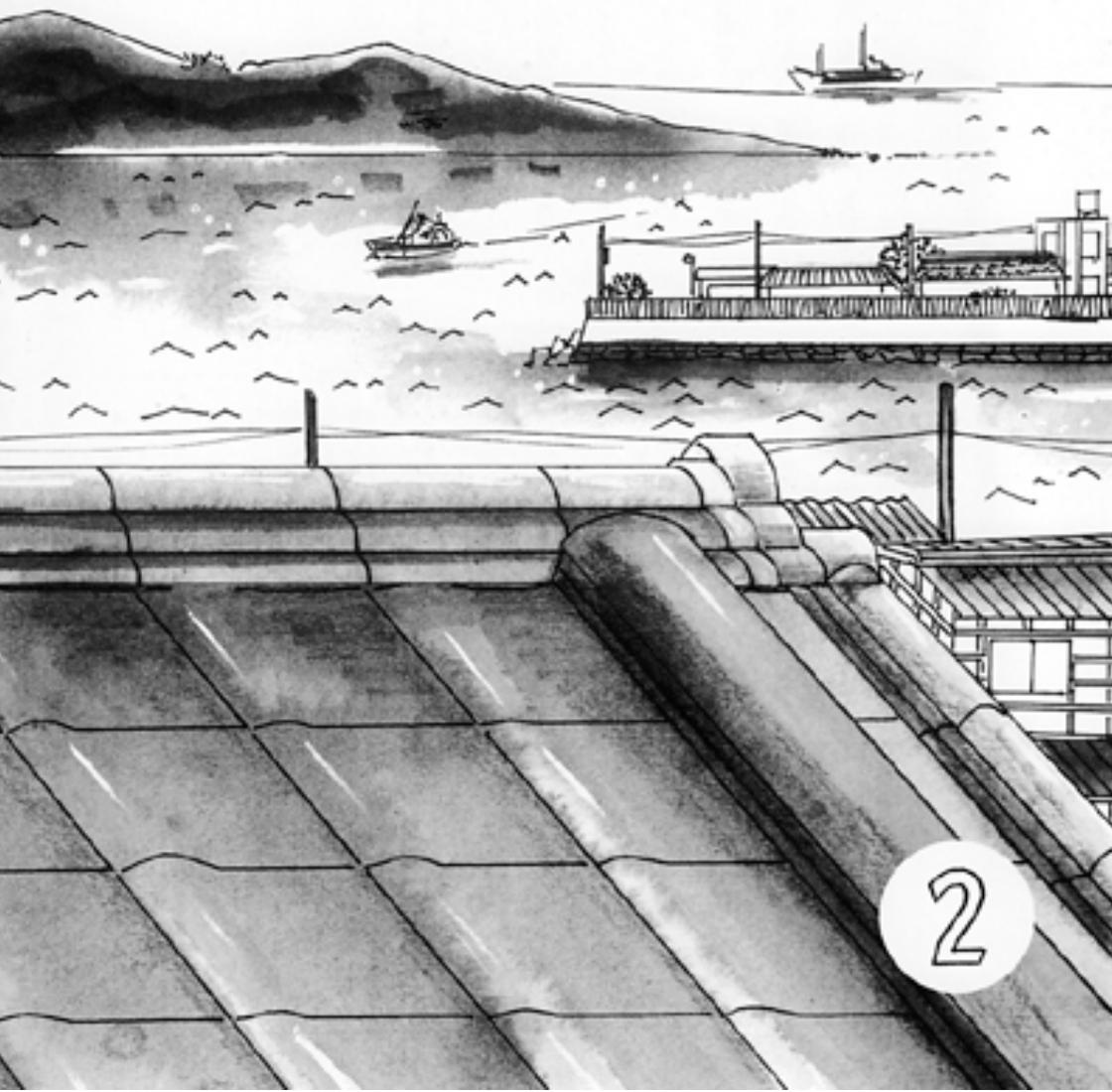


令和2年2月5日発行(毎月5日1回発行)  
第69巻2月号(通巻727号)

# 風土



2

## 吹雪く夜や懐紙に魚の隠し捨て

(句集『高蘆』より昭和四十七年作)

桂郎師は盟友の斎藤玄の句集『玄』出版のお祝いに北海道へ旅立ち、その後流水を見に、また網走を訪ねています。この句も「かき島荘」に宿をとった時のものです。前書に「かき島荘。ルイベといふ鮭のさしみの他わが舌に乗る魚一尾だになし」とあります。句の中の「魚の隠し捨て」とは美食家の桂郎師ならではの、膳に出された魚が口に合わなかったのです。公然と残すわけにもいかず懐紙にそっと包んだのです。

## 竹鳴つて鬼打ち豆や雪に散る

(句集『高蘆』より昭和四十七年作)

これは七疊小屋での節分の様子です。庭に向かって豆を投げると、藪の竹の幹にあたるのです。豆は音をたてて弾け、降りだした雪に散っていきます。健康を祈ったとは思いますが、身の内の鬼に魅入られたのか、この年の春にはお酒の飲みすぎで、肝炎となり入院してしまいます。

## うら若き三月の川溪を出づ

(句集『貴椿』より平成十二年作)

器師は、先人の句を踏まえて一句に仕立てることがよくあります。一種の本歌取りです。この句は飯田龍太の「いきいきと三月生る雲の奥」と、「春暁のあまたの瀬音村を出づ」を踏まえて作っています。「うら若き三月の川」からは雪解けの勢いのある星まれたての流れを相心像できます。また「婆出づ」も溪谷を力強く飛び出す急流を相像します。これにより、読み手に重層化した想像世界を伝えているのです。

## 啓蟄や桂郎三鬼ぞろぞろと

(句集『貴椿』より平成十二年作)

この句も桂郎師の「啓蟄や三鬼の海に誰かいつ」を踏まえています。桂郎師の句の「三鬼の海」は、西東三鬼の「秋の暮大魚の骨を海が引く」を踏まえたものです。器師の「桂郎三鬼ぞろぞろと」は地獄にいる先師たちが、啓蟄に乗じてこの世に現れるところを表現しています。器師は桂郎師や三鬼、ひよつとしたら波郷の魂にも囲まれて、たじたじとなっているのかもしれない。

還る

南うみを

散もみぢしばらく鯉に押されゆく  
落葉踏み還るといふはよき言葉  
綿虫のあたりの空気ほぐれをり  
あをぞらのどこか虚ろや冬紅葉  
枝打ちの落としたる枝に足下す  
真つ直ぐに立ちてももの言ふ冬木の芽  
花やつで蠅のたぐひの虫ばかり  
しぐるるや干魚あぶればすぐに反り  
夜寒さの机に落とす鍵の束  
冬空が畝作るたび圧してくる  
白鳥の汚れちらばる雪のうへ  
みづうみの闇ひたひたと鴨雑炊



# 竹間集

同人作品



ジャンダルム

田村すゝむ

「おいでやす」やつぱり古都の菓子紅葉  
師走早や歡喜の歌の第九聞く  
甲州の空に色増す百目柿  
蜂には蜜人には香りの冬薔薇  
良き夢の続きを見んと蒲団干す  
十二月八日はジョンレノンの忌  
山眠る槍よ奥穂のジャンダルム

冬迎ふ

小林輝子

大根を吊るせば来る山の風  
沢庵を漬けるにひと日使ひきる  
髪切つて最晩年の冬迎ふ  
朴落葉逆立つ風の山社  
風除けに風の棲みつく十三湊  
待ち人のなかなか現れず虎落笛  
後手後手の終活作業冬に入る

綿虫

田中佐知子

等伯の松のしぐるる智積院  
綿虫や上目遣ひの龍燈鬼  
親王の墓を鎮めて冬紅葉  
朝寒や庫裡の竈火盛るなり  
製塩炉跡の敷石しぐれけり  
橋立の松のきらめく時雨虹  
アベマリアに終はるサックス冬薔薇

文化の日

中村 洋子

文化の日いつも未完の渋谷駅  
母よりも祖母の手順の大根漬  
かいつぶりみじろがざれば空動く  
ひよんの笛風に音符を乗せてゆく  
散らかしてまた片付ける文化の日  
回廊に猫の足跡神の留守  
プリンセスアイコのそよぐ冬薔薇

鴨進む

浅田 光代

湯ざめして身のひと回り小さくなる  
小春日やバス停の椅子ぐらぐらす  
石路咲いて母の針目の台ふきん  
笹鳴や去来の墓に新塔婆  
隊列のすこしあやふや鴨進む  
みんな触れて小賀<sup>おがたまのき</sup>玉木や冬暖か  
冬もみぢ沈め動かぬ水となる

白川女

橋添やよひ

神の留守挺子利かせある白川女  
浅漬けやスープの冷めぬ距離に住み  
千秋楽の技は外掛け大相撲  
銀杏落つ音の湿りを持ち帰る  
祈ること多き濁世や一葉落つ  
霜夜あけ鶏鳴ひびく戦没碑  
息災といふよろこびの今年米

小春日

柿沼 盟子

剃刀のごとき月立ち秋気済む  
萩刈つて角の尖りし石畳  
一杯の白湯ふるまはる翁の忌  
客蒲団日に膨らます冬隣  
立冬や甘辛そろふ袋菓子  
朝の雨やんで小春日始まりぬ  
石垣の胸突く反りや冬の空

大宝槌

間島あきら

音<sup>ね</sup>を選ぶ鰐口三つ鳥雲に  
「幸を呼ぶ鐘二回まで」梅二月  
向き合うて声待つ大樹鳥帰る  
碧空へ一山放つ杉花粉  
風光る水子地藏の千体に  
「一隅を照らす」木喰仏の春  
白梅や石松墓碑は三代目  
橋鼻に「山門不幸」寒戻る

法堂に陰影を深き春障子  
石松の道中合羽堂冴ゆる  
奉納の竹包十二春の塵  
露のたう子宝祈願の一樹抱く  
春日燦くわんおん像のまなこ千  
万作や扉を開け放つ座禅堂  
「放番」札吊る座禅堂露の臺  
寺の芯の掃除小僧や紅つばき  
浮き彫りの透ける竜の眼あたたかし  
参道の日差しへ寄りて孕み猫  
堰落つる春水の翳鱗なす  
あたたかや大宝槌の淡き音

# 山河集

同人作品



## 南うみを選

母の手を撫づれば白し初しぐれ

雨宮 桂子

星よりも冷たき母のほほに触る  
煮凝や仏弟子となる母小さし  
しぐるるや収骨になき喉仏  
存へて冬の蜻蛉のゆくへかな

小春日や水の重力背負ふダム

瀬戸 薫

行く年の草かたまつて流れゆく  
欄干の擬宝珠光れり冬入日  
立冬や喪中葉書で知る訃報  
傘立てに杖立ててゐる寒見舞

天高し歩幅ひろげてよるめけり

川田 好子

思索するほどにあらねど懐手  
石路の花海難学徒の碑を灯す

冬晴れや即位パレードきらめきて  
老いたれば薬味の葱の欠かされず

笹子鳴く去来の墓のつつましく

渡辺 やや

どんぐりの去来の墓をこつと打ち  
掌にぬくき如来の綱や十夜寺  
小上がりに喜寿の女子会新走り  
今朝の冬味噌汁の具は千六本

甲斐行けば富士の笠雲冬はじめ

石井美智子

一葉の碑 高し冬雲 雀  
予防接種の列整へて十二月

冬服は釦少なし着せ替へる  
諳んじる雨ニモマケズ冬の畦

## 風土独語／南 うみを



綿虫やあの世この世と行きもどり

杉本薬王子

この句は浮遊する「綿虫」を魂と見て、あの世とこの世を行きつ戻りつしていると捉えました。このような感覚には、年輪を加えた作者の死生観が隠されています。

存へて冬の蜻蛉のゆくへかな

雨宮 桂子

「存へて」は何とか生き延びたという意味があります。作者は冬の日溜りを弱弱しく飛ぶ蜻蛉に遭遇したのです。いずれは果てるかもしれない小さな命へ想いを馳せているのです。

音たてて蟻螂の雄食はれたり

四方由紀子

「蟻螂」の雌は交尾のあと雄を食うと言われていますが、作者はその現場を見てしまったのです。「音たてて」がリアルです。これを惨いと思うか、子孫を残すための営みと思うかは自由です。

行く年の草かたまつて流れゆく

瀬戸 薫

「行く年」には一年の出来事を振り返り、来し方に思いをめぐらす気持ちが入っています。作者は川を流れる草の塊から目を離しません。来し方の何かと重なっているからです。

夫の何かが壊されてゆく神の留守

平井 改子

一連の句の中に「亡き母を訪ふと言ふ夫神無月」があり、夫が認知症を患っていると推測できます。「夫の何かが壊されてゆく」という言葉は作者の断腸の思いから発せられています。

天高し歩幅ひろげてよるめけり

川田 好子

雲一つない秋空です。心地よさに誰もが「歩幅ひろげて」歩きたくありません。しかしよろけてしまいました。つくづくと齢を感じざるをえません。それでも気持ちがいいのです。

怪獣の面より覗く秋祭

松本 胡桃

「秋祭」の境内のいろいろな露店にわくわくしながら、お気に入りの怪獣の面を買ってもらいました。そこから覗くお祭りの風景は別世界です。幼き日がいまがえるような作品です。

笹子鳴く去来の墓のつつましく

渡辺 やや

「去来の墓」と言えば、虚子の「凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり」を思い起こします。藪に囲まれた、つつましやかな去来の墓には「笹子」が似合います。

自販機の釣銭熱き震災忌

小原美美子

作者は「震災忌」の日に、自販機で清涼飲料を求めたのです。その時の釣銭の熱さに驚き、たちまち震災の炎の中で水を求めてさまよう被災者が脳裏を過ったのです。

# 風土集



## 南うみを選

一斉に北向く羅漢冬に入る 京都

杉本葉子

冬菊や不動の丈は五寸ほど

綿虫の影の無き身を悲しめり

綿虫やあの世この世と行きもどり

綿虫のひかりの中の命かな

カシヤカシヤと落葉を踏んで満一歳 綾部

四方由紀子

風に舞ふ紅葉のなかや喃語飛ぶ

音たてて蟻螂の雄食はれたり

獲物食む鴛に車停めにけり

猪狩か銃声響き犬の声

思ひ出話尽きぬ二人や日向ぼこ いわき

平井 改子

南瓜切るこれが最後と力入れ

亡き母を訪ふと言ふ夫神無月

夫の何かが壊されてゆく神の留守

小春日の光る小石を掴みもし

駆け下りる秋と麓ですれ違ふ 町田

松本 胡桃

怪獣の面より覗く秋祭

切干の蕈も混じりて届きけり

父の背に小さなラガー挑みけり

ぐい呑みに辛子伏せ置く花八ッ手

自販機の釣銭熱き震災忌 舞鶴

小原美美子

暁をとむらふやうに鉦叩

フアッシュンヨーのセンター八十路紫苑晴

暮れなづむ富嶽の反りや小六月

冬晴へ棟上げの餅放り上ぐ

眼の黒点我を放さず枯蟻螂 相模原

岡本 尚子

唐橋を日の渡りゆく芭蕉の忌

山茶花や刻なき鐘に散り急ぐ

粕汁や郷にひとつは醸造所

粕汁や酒豪の母と下戸の父